

2026年頭所感 看護の歴史を発信しよう

日本看護歴史学会理事長 田中幸子



田中幸子 理事長

2024年5月に提案され、パブリックコメントを募集していた看護学教育のモデルコアカリキュラム案は、2025年3月に、令和6年改訂版として公表されました。昨年も申し上げましたように、直接的に看護の歴史を教授する

項目は見当らず、学問としての看護の歴史の重要性・関心が薄くなっているような気がします。このような不安はさらに高まっています。

先日、たまたま看護学概論のテキストを開いた際に、看護職養成施設数を経年的にグラフで示し、解説している部分が目に留まりました。グラフでは西暦2000年前後を境に急激に准看護師養成所が減り、反対に3年課程の専門学校が増えて養成数が逆転していました。テキストでは少子高齢化、医療の高度化を理由として挙げていましたが、果たしてそれだけで説明がつくものだろうかと思いました。この時代に何があったのかを調べずに、時代の変化で推測されたことが伝承されていることに危機感を感じました。私くらいの年代にしてみれば西暦2000年というのはつい最近のことではありますが、過去はすぐに歴史になってしまいます。気が付かないうちに、記憶から遠のき、なぜこうなったのか？がわからなくなってしまうのです。現在、看護の歴史が伝承され人々の記憶に残っているのは先人がその重要性を認識し、意識的に遺された部分が多いと思います。意識せずに放置すれば歴史は欠落するか、間違ったことが伝承

されるかもしれません。

看護の発展や変容の過程において、なぜこうなったのか？が伝承されないことは、看護の大きな喪失ではないでしょうか。L.ハントは、「歴史は予言としても意味をもつ」「循環が永遠に繰り返されるからだ」「過去は未来を予見する」（なぜ歴史を学ぶのか、岩波書店、2019）と述べています。看護が憶測で語られることによって、いつしかその憶測が史実として伝承されることになり、先人の活動の足跡を失い、未来の危機対応も困難になる恐れがあります。したがって、看護の歴史は未来の看護の発展のためにも追究していかなければならないということになります。

E.H.カーは、「歴史の研究とは、原因の研究である、歴史家は絶え間なく『なぜ』を問い続けている」（歴史とは何か、岩波書店、2022）と述べています。本学会は様々な時代、様々な国の看護の歴史に関心を持つ人、それらを対象に研究を行っている人、それらを重要だと考えている人等で構成される研究者の集団です。会員の皆さんには毎年の学術集会でその時代に看護がなぜこうなったのか、大いに議論していただき、その知見（看護の歴史）を外部に、どんどん発信していただきたいと思います。2025年8月の理事会では看護の歴史に対する看護界の関心が薄れていることを危惧し、外部にどのように看護の歴史を発信していくかが課題として挙がりました。ぜひ、皆様のお力添えをいただいて幅広く看護の歴史を発信してまいりたいと考えています。

今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

第39回日本看護歴史学会学術集会 報告

学術集会長 春日広美

「日本型看護を再考する—日本の歴史・文化をふまえた看護の展望—」をテーマに、2025（令和7）年8月9日（土）・10日（日）の日程で、千葉県立保健医療大学 幕張キャンパスにおいて開催いたしました。参加者は、両日を合わせて119名でした。酷暑の中、千葉の会場まで足をお運びいただきありがとうございました。一部の会場では空調設備や音響設備の不調などから、ご不快、ご不便をおかけしました。大変にお詫び申し上げます。参加者のアンケート（n＝37）では、回答者の94%が今回の企画について「大変満足した」「満足した」と回答しておりました。これは各プログラムをご担当いただいた講師の先生方、企画委員、また、学術集会運営にあたり、お力添えをいただいた千葉県立保健医療大学の実行委員と学生アルバイト計49名の協力の賜物です。感謝申し上げます。

1日目のプログラムは、学術集会長の講演「日本型看護を再考する」のあと、4つの講演がありました。教育講演1は、柳谷（菊地）慶子先生の「江戸時代にみる看病とその担い手」のご講演をいただきました。アンケートで、江戸時代の看病について、「はじめて知ることができた」、柳谷先生の「文献資料の使い方、解釈の方法について大変に勉強になった」という意見が複数寄せられました。市民公開講座1は、小泉和子先生の「昭和期の暮らしと看病」でした。参加者は懐かしい昭和のくらしが、現代の日本の生活に文化的につながっていることを認識されていきました。特別講演・市民公開講座2は、田中ひかる先生に「派出看護の始まり-大関和の物語」のテーマでご講演をいただきました。先生のご著書『明治のナイチンゲール 大関和の物語』（中央公論新社、2023）を原案に、2026年度前半期のNHK連続テレビ小説「風、薫る」が放映されることもあり、ご興味をもって参加された方が少なくありませんでした。教育講演

2は、田中幸子理事長に「GHQによる日本の看護改革—現代の日本の看護体制への影響—」のご講演いただきました。また、理事会セッション1（戦争と看護）では、石橋星志先生に「戦後80年 証言と資料で伝える東京大空襲」のお話しをいただきました。これらのご講演について、戦後80年の節目でもあることから、参加者からは「若い世代である看護学生にこそ聞かせたい」という感想が寄せられました。

2日目は、「日本型看護としての派出看護を再考する—派出看護が現代の看護にもたらしたもの—」をテーマに、シンポジウムが開催されました。平尾真智子先生、門川由紀江先生、加治美幸先生、内田美行先生をシンポジストにお迎えし、「日本型看護」としての「派出看護」に関するご発表につづき、意見交換がありました。「今回初めて派出看護の存在を知った」「今の看護の形になった歴史を知って、今後の看護を考えるきっかけになった」などの感想が寄せられました。他、理事会セッション2（研究推進委員会）では、川原由佳里先生から「論文投稿について」のお話しをいただきました。

一般演題は口演が7題、示説が6題、紙上発表が3題でした。

他、アンケートでは、医療関係者ではない、他分野の講師から看護や看護師について話してもらったことが感慨深い、参考になったという感想が複数ありました。今後の学会企画の参考にもなると考えます。



大会長講演の様子

第39回日本看護歴史学会学術集会「第2回学会優秀賞」

研究活動推進委員会・特別委員会

受賞者氏名：鈴木沙織、城丸 瑞恵

所 属：天使大学

演 題 名：原爆医療法制定後の原爆傷害調査委員会における広島市・長崎市との協力活動

第40回日本看護歴史学会学術集会のご案内

ナイチンゲール研究から未来を展望する

—今、ナイチンゲールが熱い in Mishima—

日 時：2026年 8 月 8 日(土)、9 日(日)

会 場：順天堂大学保健看護学部

〒411-8787 静岡県三島市大宮町3-7-33 (JR三島駅徒歩 8 分)

学術集会長：小川典子 (順天堂大学保健看護学部客員教授)

西暦2020年5月12日にナイチンゲール生誕200年を迎えました。これを祝し、全世界的規模でナイチンゲール自身の著作および彼女にまつわる関連書籍、記念切手等が発行されています。

ところが、2020年当時は世界的なCovid-19パンデミックの真っ最中であり、日本においても緊急事態宣言が出され、不要不急の外出は禁止され、多くの方が亡くなられています。奇しくもナイチンゲールがクリミア戦争で体験した3密を避ける、ソーシャルディスタンスを保つ、手洗い、換気、栄養などが時代を超えて再認識され、さらにイギリスでは「ナショナルヘルスサービス (NHS) ナイチンゲール病院」としてイースト・ロンドンに彼女の名を冠した野戦救急病院が建設されたことも記憶に新しいでしょう。

世界的規模で徐々にパンデミックが終息を迎え、「ナイチンゲール生誕200年記念出版」としてクリミアの天使という一般的なイメージを越境したナイチンゲールの多面性とそれゆえの人間的魅力が日本においても研究者らによって様々な角度から再び語られ始めています。今回、ナイチンゲールの越境シリーズに自ら執筆している本学会員の研究者たちによるシンポジウムを企画しています。ナイチンゲールのイメージ自体が「クリミアの天使」「近代看護の母」「白衣の天使」という少女伝記のイメージを飛び出して、これまでの価値を超えた「既存の価値を破壊する」「永遠の今を生きる」ナイチンゲール

像についてナイチンゲール研究者たちに思う存分語っていただき、新たなナイチンゲールの価値の創造を目指したいと考えます。細菌が未だ発見されていない時代に、微生物が引き起こす感染症と闘い、時代を先取りした観察力・行動力によって、時代に抵抗する彼女の姿勢から未来を展望しましょう。

今回の学術集会のプログラムでは他に一般演題、会長講演、教育講演、理事セッション、市民公開講座を企画しております。市民公開講座では、静岡県および三島市にて初めて開催される日本看護歴史学会として、歴史ある三島文化のルーツについて「歴史に学ぶ世界の見方」と題して国立遺伝学研究所名誉教授の五條堀孝先生並びに「三嶋の神様～三嶋大社の歴史と信仰」について1000年以上の歴史を持つ三嶋大社の代々神主を務めてきた矢田部家の宮司である矢田部盛男宮司に講演をいただく予定です。

パンデミックや核や戦争の脅威の絶えない現代世界のなかで、「誰もがいつかは誰かの健康に責任を負う、すなわち看護師になるときがきつとくるだろう」と書いたナイチンゲールについて、興味を持っていただけることを切に願っております。



小川典子 学術集会長

編集委員会からのお知らせ

「日本看護歴史学会誌」は年1回、3月末の発行です。投稿受付は6月1日～6月末です。会員の皆様の研究論文の投稿をお待ちしています。投稿された論文は査読とそのやり取りを通じて、できるだけ受理する方針です。紙面の充実を通じて、学会の活性化、看護の歴史研究の発展につなげたいと考えています。投稿規定は学会ホームページをご覧ください。

第14期理事・監事選挙の公告

2025年8月9日の総会で、第14期理事・監事の改選が確認されました。これにより「日本看護歴史学会理事および監事選挙規則」に基づき、本会報の発行日をもって理事・監事選挙公示日といたします。

投票期間は、発行日より2026年3月7日（当日消印有効）までとなります。投票用紙は別途郵送のものを使用し、理事(10名)・監事(2名)に相応しいと思う会員に印をつけ、投票所宛の封筒を使用し、外封筒には記名、内封筒は無記名で郵送して下さるようお願いいたします。外封筒に無記名の場合は無効となります。

なお、規則により、選挙権は会費を（今回は2025年度）期日までに完全に納入した人、被選挙権は、入会3年を経過し、会費を完全に納入した人に与えられます。

選挙管理委員会氏名 総会場で選出された選挙管理委員は次の通りです。

加治 美幸氏 鬼頭 幸子氏 ハーディング 優子氏 （五十音順）

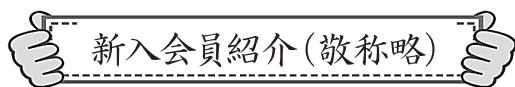
書籍紹介

『派出看護婦会の歴史』看護史研究会著 看護の科学新社（2,300円税別）

事務局からのお知らせ

日本学術会議協力学術研究団体申請にかかる情報提供の意向と調査

本調査は全会員の皆様をお願いしております。前回の会報でのお知らせをもって、QRコード、URLでの調査は終了となりました。しかし、学術会議の申請に必要な人数の確保ができていないことから、ご提出いただいていない皆様におかれましては、郵送にて調査表をお送りいたします。よろしくお願いいたします。



新入会員紹介(敬称略)

*数字は会員番号 2025年6月10日～2025年10月20日の入会

N25013 笹川 恵美 N25014 鈴木 麻記
N25015 小西 知世 N25016 伊藤美智子

※承認済3名を含まず



■事務局から

*2025年度の動向（2025年10月20日現在）

会員数：258名 ※2025年度の退会・入会者数は、翌年度前期会報にて報告します。

学会年会費：会計年度4月1日～3月31日

令和7年度から会費は、8,000円に値上げされております。お間違いのないよう納入をお願いします。2年間会費滞納の場合、退会となり会員資格を失いますので、ご注意ください。

新規・再入会手続きは本会ホームページ「入会案内」をご参照ください。

編集後記

わが国初の女性首相誕生は素早い外交手腕を発揮され何事にも先を見据えた周到な準備が必要と再認識しております。「日米連帯黄金時代」は軍事費増とセットで語られ、この先をどう見据えて準備するかは光輝いていないようです。戦後80年、戦争は誰も救わないことをも再認識する新年でありたいです。（屋宜）

日本看護歴史学会会報 第85号

企画・編集 黒田裕子（太成学院大学）
屋宜譜美子
小田正枝

発行責任者 田中幸子（理事長）

印刷 株式会社 ソウブン・ドットコム

事務局 〒261-0014
千葉県千葉市美浜区若葉2丁目10番1号
千葉県立保健医療大学
健康科学部看護学科内
事務局 春日広美
E-mail office@jsnh.jp

学会HP <http://plaza.umin.ac.jp/~jahsn/>